掲載日：2020年01月23日，面名：S106X0，記事ID：K2020012300000005000
(C)河北新報社

政府 震災追悼式打ち切りへ

諦め

▶ 五輪で復興後回しに

突然明らかにされた政府主催による東日本大震災の追悼式の打ち切り方針。被災者の状況は一人一人異なり、一律に「発生から10年」で打ち切られることに、遺族らは複雑な思いを募らせた。

（1面に関連記事）

「被災地の実情、被災者の気持ちが分からない政府の追悼式ならば、やる意味がない」

仮設住宅で暮らし、3月にようやく自宅が完成する岩手県大槌町の無職川口博美さん(70)が口にするのは諦めだ。

人とカネを東京に集め、今夏の五輪開催に突き進む政府が復興を後回しにしているように映る。「せめて全ての復興事業の完了後に表明するべきだ」。2012年の追悼式で遺族代表として言葉を述べたが、「今後は自治体の追悼式さえあればいい」と突き放す。

「遺族に寄り添う一つの儀式。いつか終わる時期が来ると思っていた」。津波で妻と母を亡くした東松島市の無職和泉勝夫さん(75)は政府方針に理解を示す。

14年の追悼式で宮城県の遺族代表として登壇。「家内と母、それに市内で犠牲になった人の分も合わせて追悼の思いを伝えられた」と振り返る。

子ども2人と両親を失い、12年の追悼式で遺族代表を務めた石巻市の会社社長奥田江利子さん(54)も「10年で追悼が終わるわけではない。自分で続けていくだけ」と話す。

容認

▶ 儀式 いつかは終わる

被災地には、打ち切りが震災の風化に拍車を掛けるとの懸念が広がる。

「毎年8月の全国戦没者追悼式は政府主催。国策に人生を狂わされた点では同じ。なぜ震災だけは10年が区切りになるのか」

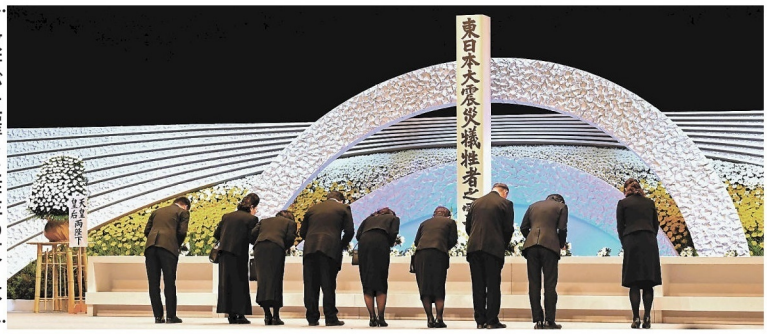
福島市の主婦三瓶春江さん(59)が疑問を投げ掛ける。東京電力福島第1原発事故により、福島県浪江町から避難を続ける。かつての自宅は空間放射線量が高い帰還困難区域にあり、戻れる見通しは全く立っていない。

「原発被災地が安全で、廃炉も完了したという間違った印象を与える。原発事故の責任を逃れたい政府の姿勢を表している」。批判には憤りが交じる。

反発

▶ 原発事故の責任逃れ

津波で夫と叔父を亡くし、18年の追悼式で遺族代表を務めた相馬市の五十嵐ひで子さん(71)は語り部活動を続ける。「震災を忘れてほしくない。政府主催の式がなくなっても福島、相馬から発信を続け、命を守る大切さを訴えたい」と誓う。



政府が主催した昨年の東日本大震災の追悼式。打ち切り方針に被災者の反応はさまざまだ＝東京都